

## 平和の礎

— 21世紀に語り継ぎたい —

茨城県 園部 順

### 一 初年兵の巻

昭和十六（一九四一）年十二月八日、真珠湾の奇襲攻撃によって大東亜戦争の火蓋は切って落とされた。陸軍部隊は、これに呼応してマレー半島の進攻、シンガポールの攻略、香港・フィリピンの進攻作戦を展開、大戦果をおさめた。昭和十七年五月にはアメリカ極東軍司令官マッカーサー元帥の居城コレヒドール島要塞をも占領、戦捷に次ぐ戦捷の報が国内に報道されていた。

その年の十月頃のある日「園部さんいよいよ御奉公の時が来ましたよ。おめでとうございます」  
と一枚の令状を持って来てくれたのは役場の兵事

係の斉藤さんでありました。令状には「昭和十七年十二月二十日東部第三十七部隊に入営を命ずる」とありました。若き血潮は踊りました。俺もやるぞの意気に燃えたのであります。

十一月頃からは入営する若者が続き古河駅のホームは文字通り歓呼の声や旗の波に埋まった。入営する若者を送り出す家族の者は千人針を作ったり、鎮守様に武運長久を祈願する「お百度詣り」等で鎮守様も賑わった。出征兵士を送る行事は大字行政区長さんが立ち合い、在郷軍人の役員の進行係によって自宅での出征祝、鎮守様での武運長久祈願と親戚、友人、知人と多くの人々の駅までの見送りが常だった。

出征の日、私も「万才、万才」の歓呼の声と旗の波に送られ古河駅のホームに立った。ホームではその日の出征者が紹介され決意表明の挨拶をした。満二十歳を迎えた若者はいずれも祖国日本の平和と東洋平和のために、生きて再び還らざる悲愴な覚悟を披瀝した。兵営には一人ないし二人位

の身内の付添いの者がつくことが多かった。勇躍、古河駅を後に小山にて水戸線に乗り換え水戸に向かうのであるが、当時の汽車は水戸まで約三時間もかかった。下館を過ぎ笠間駅を過ぎる頃は、祝の酒も切れ冷静な我に還った。

列車が筑波の峯を右手に見ながら一路水戸へと走る。生還を期さない日本男児らも、涙など見せてはならないと心に言い聞かせながらも、之が故郷の見納めかと思うと涙をおさえることができない。前の座席には付き添いの義兄が座っている。兄も知らないふりをしていたが横を向いてハンカチを顔に押し当てていた。これは私一人だけでなく出征する多くの若者のすべてが一度は越えなければならぬ試練の道程ではなかったろうか。

部隊へ着くと所属する中隊は決まっていって班長が迎えに来てくれていた。時間になると家族とも分かれ兵舎に入った。班内には軍服・下着・軍靴等整然と揃えてあった。見ればすべて新品であ

る。新品の服装は外地行きと聴いていたが、防寒具まで支給されているところを見るとどうやら寒地であることが想像された。翌日には中隊長の訓示や説明が行われたが、三日目からは訓練が始まった。一週間後の日曜日には家族の面会を許すという連絡をした。訓練は厳しかった。日曜日には面会のため家族が来てくれた。しかしこの面会が今生の別れか、しばしの別れになるか知る由もなかった。

翌日命令が出た。「北支方面軍に転属を命ず」というものであった。このため十二月三十日に屯営出発とのことである。当時部隊内では誰もが南方戦線の希望に対し、北支では若干がっかりの感があったが命令の下いかんともすることはできない。三十日未明、水戸第三十七部隊を後に北支那へと向かった。

(一) 玄界灘の怒濤をついて釜山港へ

輸送船は下関港を出帆、朝鮮半島経由であつ

た。出帆後皆甲板に出て内地の山々にお別れをした。玄界灘はその日時化て波が荒く、初めての航海の初年兵は皆船酔いで座席に倒れていた。釜山港に上陸の頃は船酔いもやや醒めたが上陸しても地面が揺れているような感じがした。釜山駅に入っていた列車は内地の列車に比べ大きく威圧されるような感じがした。

初めて見る広軌鉄道の列車である。京城（今のソウル）から鴨緑江、山海関を通過して北京へと向かう。北京から津浦線を南下、黄河南岸の「開封」に着いた。開封は我らが先輩第十四師団奮戦の地である。

## （二） 初めて踏む大陸の大地

開封は河南省きつての古都で、高い城壁に囲まれた町である。駅には初年兵受領のため、部隊の幹部、班長等が出迎えてくれた。日焼けした勇士は内地の上官とは違い百戦錬磨の兵のように見えた。駅を出て露地に入ると何と「ほこり」が三〇

センチも溜っていた。傍らを見ると行き倒れの者か干乾びた死骸が路傍に横たわっている。これが戦地というもののかとつくづく感じられた。

北支は平均して雨量が少ない。一度突風でも吹くと埃を天高く舞い上げ辺りは暗くなるほどである。これを「黄塵万丈」と言っている。またこの埃が海を越えてはるばる我が国の方まで飛んでくる。これが黄砂現象だ。また黄河は流域土砂の微粒子を溶かし下流へと流れている。海への河口は渤海湾であるが河口付近の海は一面黄色く見えるほどである。黄海と呼ばれている。

我々初年兵は実は第四十一師団（基部隊）要員であったが原隊がニューギニアに在るため、教育を第三十五師団に依頼したものであった。中隊は連隊通信隊であり有線と無線とに分かれている。私は無線小隊に配属された。訓練は寝ても醒めてもモールス信号の送受信である。基礎ができてからは毎日が営外といっても内地とは違う。周囲は言葉の判らない敵地である。駐留そのものは絶え

ず警備の任を負っていた。いつどこで何が起こるか計り知れない中での訓練であり警備勤務でもあった。

七月の末、幹部候補生として採用の命令があった。それからは連隊内で集合教育を受けた。教育は一般歩兵の訓練であった。教育に当たったのは陸軍士官学校出の新任少尉で連隊旗手でもあった。教官は若さとはち切れるような元気で熱心に教育に当たってくれた。

その頃は中国へ渡って初めての夏である。一度越すことができれば病死の心配はないと言われていた。生水は中国へ渡って初めての人には命とりである。日本の水とはちがい硬水であり、アルカリ分は非常に高い。その上有害バクテリアの巣窟でもあり、煮沸したお湯以外の飲用は禁じられていた。同年兵で一番頑強といわれた一人が大丈夫といつて良く生水を飲んでた。果たせるかな彼は赤痢のため惜しくも病死した。初年兵のほとんどが生水は飲まなくとも胃腸をやられ、栄養失調

に陥り、脚気等を併発していた。私も極度の栄養失調によって体重は四十数キロ位までに落ちた。それでも精神力は張りつめていて訓練等を休むようなことはなかった。

訓練は大陸の熱砂の中で厳しさを加えていた。華北交通貨物廠奪還を想定した演習のある日、米空軍機の襲撃を受けた。敵機は機銃を乱射した。教官は敵機に対し対空射撃の命令を下した。そこには土塀があったので候補生は土塀に託して対空射撃を行うため銃口を土塀の上に出した。とたんに大きな爆音がした。私は敵機目がけ引鉄を引こうとしたがどうしたことか指が動かない。何回となく試みたが手の自由を失い朦朧とし、自分がやられたのかと思っっているうち前後不覚になった。後で聴いた話であるがそこには三三〇〇ボルトの電流の流れている鉄条網が張っており、その感電によるものであったという。

息を吹き返した時は近くの警備隊に運ばれ手当

を受けている最中だった。他に同僚三人がやられた。その中でも一番先に気が付いたのは私であった。他の三人は唇を紫にしてまだうめいている。

死とはこういうものかと死の経験をしたようなものであった。そして四人の候補生は教官の手落ちもあったとして練兵休（休みのこと）にはしないからゆっくり休むよう指示された。四人はそれぞれ体の突端部に放電した小豆粒大の穴があいた。

体の回復、傷の治りは意外に早かった。一週間位の静養ですっかり元気を取り戻すことができた。電気療法の効果とも言おうか、体調は感電前より良くなった。続いた下痢も治り教官が差し入れてくれた見舞いのものなども旨く、食欲も旺盛になった。今までの病気はすっかり治ったのであった。その後体重も復活の方向へと向かった。

九月には黄河左岸の掃討作戦のため黄河の程近く「開封」より百キロ程度も西方だったであろうか「通許」と言う小都市の警備についた。この町は水の都とまで言われる程で街の中央に大きな掘

井戸があった。北支方面の井戸は水位が大変低いのが常であるがここはそうではなかった。比較的水位は高く良質の水がこんこんと湧き出ている。市民はここに水を求めてやって来るので井戸端は多くの人でいっぱいであった。

古年兵の戦友はよく「弾丸は前からばかりくるのではないぞ」と言っていた。これは上官同僚に對する牽制でもあり古年兵としての戒めであったかと思う。銃、弾薬、手榴弾は常時誰もが持っているもので、部下を粗末な扱いをしたり、同僚を裏切るような者は戦闘に紛れ射ってやるとの意味であろう。しかしながら軍紀は乱すことは許されないのが軍隊である。

城門での歩哨に立っている時は色々な場面にも遭った。城門の歩哨は中国兵と相對して立っていたので中国語を覚える絶好の機会でもあった。中国兵は字の書ける者はほとんどいなかったため、筆談という訳には行かなかった。身振り手振りでの話である。ある日馬車に送られた結婚式に向

かう花嫁の列がやって来た。馬車を止めて花嫁をのぞきこんだ。頭にも何枚かのタオルを被っていた。中国の歩哨が素早くタオルを取ってしまった。何をするかと抗議したら、それが風習だと言う。花嫁が美しいので途中あちらでもこちらでもてはやされたとの意味である。中国兵はもう一枚タオルを取って私にくれた。前線での思わぬ和やかな風景であった。

葬式は歩哨にとっても嫌だった。ある日、城門近くの家で葬式があった。「泣き女」は一晚中泣き続けた。何と泣いているかと中国兵に尋ねたら、あんな良い人がなぜ死んでしまったかと、故人の生前の功德を称えながら泣いているという話であった。泣き声は一晚中大きくまた小さく続いた。東の空が白む頃は驢馬ろばが鳴き始め、その驢馬の鳴く声は独特で一層哀調を添える。歩哨も声もなく黙って立っているのである。

またある時は中国警備隊の糧秣輸送があった。あいにくの雨で城門付近は泥濘となった。破れた

袋でもあったのであろうか、積んであった小麦の粒が泥濘にかなりの量こぼれた。それを見た中国人の中年の女性が我れ先にと拾いに来た。泥濘の土と一緒に小麦粒である。あれを拾ってどうするのだろうと私は不思議にその光景を見ていた。一人が家に戻り竹のざるを持って来た。城門の前はクリーク（小川）であった。土との混合小麦を水にしたしては丁寧にすすいでいる。土は洗い落とされ小麦粒だけが残った。それを乾燥すれば食糧だ。生活の知恵に驚かされた。

中国警備隊の糧秣輸送もあって、城内は何か緊迫の度を加えた。我が方の警備隊も一層警戒を厳にした。そんな十一月のある日小隊長が甲種幹部候補生採用の通知と伍長の階級に進める旨の命令を届けてくれた。分哨は即刻分哨長交代があり、兵長の分哨長に代り私が分哨長の任につき一幕もあった。その頃私の体調は絶好調で体重も七十キロとなり軍服はきつくなっていた。十二月陸軍予備士官学校入学のため「通許守備隊」ともお

別れた。入校は一月であった。甲第一八七〇部隊は河北省保定とあった。

## 二 「且教、且戦」陸軍予備士官学校の巻

甲第一八七〇部隊は保定陸軍予備士官学校の秘匿名である。保定は北京の南方約百二十キロの地点に在り、西には紫にけむる五台峰が連なり永定河の畔りの山紫水明の古都である。我が第十四師団もその昔永定城攻略の際、永定河渡河に悪戦苦闘をした地である。その地に蒋介石総統は軍官学校を建て教育した場所であった。蔣総統自身日本の士官学校での教育を受けていたので建物の配置等内地の予備士官学校そっくりであった。その第十期生として昭和十九年一月二十日入校した。

一般歩兵・機関銃・歩兵砲・通信の各兵科、それに輜重隊（別に北京校舎）合わせて幹部候補生は約一千人であった。入校式時の校長閣下の訓示も厳しかった。

「本校における教育は野戦小隊長の教育が目的

であるので指揮官としての確固たる信念・知識・技能の教育は勿論であるが、いかなる激務にも堪え得る体力・気力の練成に努める。将校候補生としてふさわしくない者に対しては退校を命ずるに本職は躊躇しない」とするものであった。候補生もびっくりし、一段と身の引き締まる思いであった。

入校第二日目の明けがた、非常呼集があった。完全軍装で永定河左岸の敵攻撃が想定であった。三日目も非常呼集があった。午前四時である。兵にとつて非常呼集は最も苦手の訓練であるが二日と続いた。四日目も続いた。服装は完全軍装である。各隊は城内にある保定社社まで約五キロの駆け足集合参拝であった。さすがの候補生も皆びっくりした。訓練は厳しくスピードも早かった。

戦術の講義はどこも中隊長の受け持ち（中隊長は少佐の階級、普通部隊の大隊長）であった。午前中、四時間位休憩なした。候補生はめいめい小便用のビンを机の下に秘かに隠し持参し、一言も

聞きもらさじと頑張った。我が中隊の中隊長は岩谷少佐であった。体格絶凜、背丈も一メートル八〇センチ、体重も八〇キロもあったが実に候補生思いで崇高な人徳の持ち主であった。

ある日、営庭で一〇〇メートルの競争があった。中隊長は長靴、候補生は運動靴であったが中隊長にかなうものはなかった。スポーツマンでもあった。かつて士官学校卒業の折には天皇陛下の御前で記念講演を行った秀才であった。広量にして気節高く、豪気にして情誼に溢れる中隊長の姿はひとしく候補生の敬仰の的であった。

区隊長は春口大尉で九州熊本の人であったが、西郷隆盛をちょっと背を低くしたような方で、候補生は小西郷と呼んでいた。性格・識見共に中隊長そっくりで候補生の信頼を集めた。訓練は北京郊外にある長新店野営演習場で大規模に行われた。山岳地帯の演習では一カ月位で軍靴の鋳がすりへり半張皮に穴があいた。幾十里ともなく走り廻った。

山海関、秦皇島付近は満州側、中国側を分ける万里の長城を挟んでの演習も壮烈を極めた。秦皇島付近では海洋上陸作戦の演習が大規模に行われた。中隊長は戦術の講義の折、強調された。「戦鬪の酣たげなわなる時、彼我両軍の奮戦力鬪は極度に達し、勝敗まさに岐れんとするや戦勢混沌として戦鬪惨烈を極むべし、この時において皆指揮官は敵も亦我と同等もしくは以上の苦境にあるを思い、当初の意志を遂行するを要す」と。これは日本陸軍が日清・日露の大戦を通し血で染めた戦訓であり、今我々は社会を生き抜く上での処世訓でもあり私は座右の銘としている。

八月初旬行われた部隊合同大演習には大陸の暑さのため軍服の乾いている時はなかった。そのため数十人の日射病患者を出した。私は電流鉄条網のお陰でいかなる演習にも堪え得ることができた。軍隊教育は学校教育とちがいが、物事に対し、どうするか結論が先である。状況判断、判決が先で理由はその後である。しかしかこのような理由

によりこのようなことが適當であろうとの学校教育との大きな差異があった。軍隊における指揮官は戦いのために部下を教育する任を持っている、自分の教育の良否は戦鬪の勝敗に係わるのである。かつ教え、教えた部下と共に戦うのが軍隊である。尊い部下の生命、陛下の赤子を預かっているのが指揮官である。百折不撓と弛まざる研鑽努力は指揮官の使命であるとも思われた。

八月下旬には奮励努力の甲斐あって卒業の喜びを迎えることができた。卒業式の前日、命令が出た。全員整列である。今まで共に学び共に歩んできた一人の候補生の退学の命令であった。理由として体力不足と言うものである。彼は中隊一の美男子であるが後期には体調が悪く幾らかの休みがあった。真面目な男だ。学業の成績は良かった。明日卒業を控えての原隊復帰である。彼は慟哭した。送る者も涙なしには送り出すことができなかった。入校時の校長閣下の訓示通り各隊より退校処分を受ける候補生が出た。「退校処分に本職

は躊躇しない」との言葉通りであった。

翌日滞りなく卒業式を終わり、各々原隊へと巣立って行った。卒業式後のある日、入浴していると五、六人の候補生が失礼しますと入って来た。ふと見ると小森谷一君である。思いもよらぬ巡り会いであった。彼は輜重隊で北京の学校であったとのことであった。卒業式のため本校に来たのだそうだ。お互いに無事でよかった。

第四十一師団要員は親からはぐれた迷い子のようなものであった。まま子扱いの中ではそれなりに一生懸命努力する以外になかった。第四十一師団の名にかけても私はあらゆる所で頑張った。卒業はしたものの原隊とは連絡がとれず取り敢えず留守部隊に帰ることになった。途中満期兵の輸送指揮官として宇都宮に帰った。宇都宮に帰ってもそんな見習士官が帰る訳がないと言う。これも取り敢えず宇都宮、水戸、高崎と三つの連隊に仮配属の身となった。

### 三 再び大陸の前線への巻

その後の調べによって予備士官学校卒業後は既に北支派遣軍に転属となっているので至急北支に戻って来るようにとのことであった。今度は逆に初年兵を引率し北支に戻ることもあった。所属は第五十九師団通信隊で山東省済南にあった。やっと落ち着いたと思う十一月転属の命令があった。甲第一八九〇部隊河北省石家荘とあった。甲部隊は北支方面軍直轄の部隊であるがと疑問の裡に赴任した。

#### (一) 石家荘陸軍予備士官学校

着いて見るとそこで待っていてくれたのは何と保定予備士官学校時代の区隊長、春口少佐であった。幹部候補生の教育が保定だけでは間に合わず、ここも予備士官学校として新設され、第一期生からの教育をしていると言う。よく来てくれたと旅の労をねぎらってくれた。保定での区隊長が中隊長であるのでその人格識見は存じ上げていたので忠誠を誓った。区隊長將校として幹部候補

生の教育に当たるため自らも必死の勉強をせざるを得なかった。おまけに第十一期生は動員学徒組である。知能は各々優れていたが何と云っても初めての大陸生活であるので体力的に非常に劣っていた。これは自分がなめた初年度の夏と同じで同様に働いた。校長は比島バターン半島作戦において悪戦苦闘の末、勝ち抜いた福知山の連隊長、吉岡少将であった。南方の熾烈な戦闘の教訓を教育の場に生かそうとするものであった。従って毎日の訓練も壮烈を極めた。

約八百人の幹部候補生のうち六十数人が苛酷な訓練に堪え切れずあたら生命を失った。後に校長も方面軍司令官より過度の厳しさとの指摘をうけたやに聴き及ぶ。それでも二月には卒業生を送り出し、三月には第十二期生を迎えることとなった。その頃区隊長から本部付の命令が出た。一般部隊では連隊旗手の任務であるが、学校では校長専属の副官である。校長直属として身の回りの世話から訓練、教育等のための下準備と合わせて部

隊全体の下士官に対する普通学の教育が主な任務であった。

私は下士官の普通教育には特に力を注いだ。何となれば良い下士官を持つことは部隊の戦力であるからである。軍隊教育令なる典範が連隊長は常に良い下士官を持つことに心掛けるよう戒められている。

校長は古武士風の厳格そのものであったので副官職が三カ月と勤まった者はいなかった。園部少尉が二カ月も勤まるかが幹部の間の予想であったらしい。それは昼の勤務時間、夜の宿舎にいる時間を問わず、お呼びの場合は直ちに正装して校長の下に行かなければ氣にくわぬという性格の持ち主であったからである。従って自分の行動はいかなる場合でも明らかにして置かねばならなかった。朝の部隊出勤等についても少なくとも校長よりは一時間前に出勤し、当番兵を指揮して一日の準備は万端にして置かなければならない。それが

日課であるが、日曜、祭日、昼夜の別なく緊張の連続であった。送り出してくれた春口中隊長の期待を裏切るようなことはできない。中隊の名誉にかけてもと文字通り格勤精励これ勤めた。

三カ月経っても五カ月経っても解任の命令は出なかった。春口中隊長もよく呼んでは励まし勞をねぎらってくれた。厳しい中にも味のある教訓が多かった。今も校長の言行を処世の道としていることが多い。

ある時こんなことがあった。高級主計が校長の所には酒や肴の材料はあるかと尋ねられた。酒は一般下給品程度、肴等は当番兵が宿舎の前に作った野菜の「いため」位と言った。酒と食油をやるから当番兵を炊事場まで取りに来るようにとのことであった。早速当番兵をやって頂いて来た。当番兵が中々良くやるので、今日は茄子のてんぶらを揚げて校長に差し上げようと宿舎の裏でてんぶらを揚げていた。

そこへ校長がお帰りになった。校長はこのよう

なもののどこから持って来たのかと言われた。当番兵は素直に炊事場から貰って来ましたが、と言った。「馬鹿者」とてんぷら鍋を蹴飛ばしてしまった。園部副官を呼べとの事で呼び出された。厳格で曲がったことは絶対行わない校長の性格は良く知っていたので私も気が付いた。校長の前に直立不動の姿勢で陳謝した。私が主計さんにおねだりしたことで主計さんにはおとがめが及ばなかった。当番兵も校長のためにはと思いやったことが何故悪いのかと泣いていた。

校長が言われるには「炊事の糧秣は幹部のためにあるのではない。兵と等しく分けて食べるものであって米一粒たりとも特定の幹部のために使ってはならない」との訓示であった。私は今後充分気を付けることを申し上げた。多くの部隊で上級職の者は、ややもすると軍の糧秣をほしいままに扱い、兵には厳しく扱わせることがおうおうにしてあった。私は校長の話に成る程と感じた。崇高な部下思いの姿であり最高指揮官として取るべき

正しい道であると改めて敬服した。

後になって校長に呼ばれた。先日のことは心の中では有り難いと思っていたが、有り難いだけでは部下の示しがつかない、敢えて怒ったと述懐して、これからも職務に精励するようにと、中々あり付けないお酒一升を頂いた。私も専属副官の職務についてからの一つの大きな出来事であった。春口中隊長に頂いた酒一升を持参して軍隊流の事故報告をした。そこには何かほのぼのした温かみを感じた。第十二期生は学徒と違い現地仕込みなので体力も優れており、教育もし易かった。

その年の八月十五日、隣接する部隊は航空隊であるが、何かざわめいて風雲急を告げているような様子であった。情報によるとポツダム宣言受諾だ、言い替えれば敗戦だという。そんな馬鹿な話があるものかと信ずることはできなかった。校長は自ら北京方面軍司令部に赴き確認と今後の取るべき処置等について伺いに出向いた。やはり戦いは敗れたのだ。講堂に集まった幹部に対し校長よ

りその達示があった。全員痛哭の涙をのんだ。各部隊は日本保有船腹の状況から引揚げに数年はかかる見込みのため直ちに現地自活の態勢を取るようにとのことであった。

#### 四 終戦そして現地自活の道と武器接收の巻

ポツダム宣言によると海外にある軍人、居留民全部日本に引き揚げるといふものであったが、前述のごとく保有艦船のほとんどを失った日本が全軍を内地に引き揚げさせるためには中国方面は数年先という。その間各部隊は現地自活によって生活することになった。営内の練兵場を耕し、作物を作るべく準備し、秋には麦を作るべく準備を進めていた。部隊には炊事等で多くの現地人を使っていた。麦の作り方についても彼らから話を聞いた。

ある日、私は多くの中国人に対してこんな質問をした。「戦いは終わって今まで日本軍がここを治めていたが、これから代ってアメリカ軍が治め

るようになるであろうが皆さんはどちらが良いと思うか」。大部分が日本軍の労働者として炊事場で働いており、我々日本軍は中国各地の治安維持のため少なからず貢献しているので日本軍に引き揚げられては困るという返事が返って来ると考えていたが、それは日本人の一人よがりだった。

答えは全く期待に反していた。「我々は日本が支配しようとしてアメリカが支配しようとして蔣介石が支配しようとして毛沢東が支配しようともそんなことは関係ない」と言う。「毎日毎日が安心して暮らせ、楽しく自分の職業（仕事）に励むことができればそれが一番望むところだ」と言う。治乱興亡が激しく戦乱の度に家を失い家族を失い、虐げ続けられた民族の歴史は窮極の望としてそのようなことであるうか。改めて中国の国状を知った。民の望みはまさに「安居楽業」かとおづく感じた。

九月に入ると教育隊も警備隊に代った。石家荘北方約二十キロ地点にあった「獲鹿」の警備隊を受け持つことになった。金子中尉率いる一個中隊

を「獲鹿」警備に派遣した。終戦後の急の出動命令に、戦争は未だ終わっていない続いている、日本は負けていない、と一様に思った。大変なご苦勞なことであり校長以下その壮途を見送った。

「獲鹿」において警備を交代した夜敵襲をうけた。我が方は金子中尉の手とも足とも頼る渡辺准尉及び兵二人を失った。土賊の襲撃であったが執拗な攻撃は延々三時間にも及んだとの報告であった。翌日、事情調査と前線激励のため私が下士官一人、兵五人を率いて「獲鹿」に派遣された。金子隊長以下に逢い労をねぎらい校長の伝言を伝え、七人は乗馬姿で砂ぼこりをけつての往復であったが襲撃を受けるようなことはなかった。十一月には命令が変わり守備隊は引き上げ、国府軍（中国正規軍で蒋介石統率の下にあった）による武器弾薬等武装解除を受けることとなった。その後の警備は国府軍が受け持つというものであったが、心もとなく感じた。

終戦直後、数年の現地自活を覚悟していたが、

輸送船は米軍の配慮によるものとの情報があった。十二月急遽命に依り我が校部隊は北京方面軍司令部において軍人及び邦人の帰国業務を担当することとなった。帰国業務を行うためには多くの幹部要員を必要とした。そのために我が部隊が選ばれたのだと言う。

## 五 帰国業務の日々の巻

北京に着いて、さらに山東省塘沽行きを命ぜられた。内地送還のための輸送船の発着は塘沽港である。塘沽には元日本軍の大きな貨物廠があった。その倉庫を改造し軍人及び邦人の引揚げのための集合場所とした。名づけて「塘沽集中営」と国府軍はいった。

アメリカ海軍は日本人送還のためかつての上陸用舟艇LST（乗船人員千人）及びリバティ（乗船人員三千人）を何隻か中国方面にも配置してくれた。北支那奥地の部隊等全部この集中営に集められた。山西省太原方面の旧陸軍野戦病院の従軍

看護婦の皆さんが頭髮を切って、軍服をまとい兵に混じって帰国する姿は痛ましく無念にも感じられた。

引揚者は英文・和文リストを作り、米軍司令部及び国府軍司令部の検閲を受けた。特に国府軍は、戦時中中国人を虐待した者のチェックが厳しく戦犯として取調べを受けた。私の任務は連絡係将校として通訳一人と共に毎日両軍司令部に名簿を提出、米軍司令部の指示による船腹の状況（明日何隻）によって帰国班の編成準備をし、円滑な帰国業務を行うことであった。奥地の部隊に急遽引揚げを命じ、集まって来た部隊の人員を掌握、名簿を作り整理する作業で毎日が大変であった。私は約束通り乗船班の組み合わせをし、定められた時間には必ず名簿を提出することであった。特に米軍は約束事項と時間を守ることは厳しかった。ある日、帰国者を消毒する薬物が無くなったので米軍にお願いした。薬物は直ぐ支給させることになり所定の日、米軍倉庫まで取りに来

るよう指示があった。ところが接収をうけた日本軍には私の乗る連絡用ジープが一台しかなかった。運転手に暇さえあれば良く整備はしてくれていたがその日途中で故障してしまった。約束の場所についた時には一分経過していた。私は一分だけだから何とか勘弁して下さいと頼んだが、一分でも駄目と強く断わられ、明日の同時間にくるようにとの事であった。改めて時間を守ることの大切さを教えられた。

帰国業務は日曜日も祭日もなかった。昭和二十一年一月この任務について以来五月九日に帰るまで一日も休むことはなかった。

米軍司令部の係官は海軍少佐フェルドと言う人であった。五カ月も毎日顔を合わせているうち、打ち解けて心も通じ合うようになった。彼から学ぶところも多かった。前述の約束を守れることもそうであるが、効率的な帰国部隊の編成の仕方等を教えてくれた。彼はかつてガダルカナル方面戦闘において我が軍と戦火を交えた勇将であったが、

何故か我々を卑下することはなかった。お互いに人格を尊重してくれての話し合いであった。有り難いと思った。

(一) 集中营における蒋介石總統の訓示

二月のある日蒋介石が塘沽集中营を査察の名目でやって来た。営内の日本人は中庭広場に集められた。總統の訓示である。「日本軍も善戦したが力及ばず戦いは終わった。中国は中国の歴史の中で今までに世界のあらゆる国から攻撃をうけたが、しかし一度も負けたことはなかった。何故かと言うと我が中国には広大な領土と四億の民がいるからだ」と語り、再び中日両国の間には侵攻等のことの起こらないよう心掛けよ、と語を次いで次のように述べられた。「もしこれが日本が勝利し、中国が敗れたとするならば日本は中国に対し多くの制裁を加えたであろう。しかし蔣總統は寛大な処置をもって安全に故国に帰してやるから私の恩を忘れてはならない」と強調した演説であった。

当時、我々日本人も中国における蔣總統の存在価値はそれなりに評価していたが、彼自身もまた自らの国情をよく知っての演説ではなかったかと思われた。引揚げが完了し、しばらくして蔣總統は共産軍に追われ台湾に逃れ台湾のみ統括することとなった。

(二) 民主政治とは

話は元に戻り、昭和二十一年五月頃になると中国における日本軍隊及び居留民の引揚げは概ね終わりに近付いた。

この辺りで我が部隊も帰国させてもらうことにした。名簿を提出したら校長が戦犯容疑で残留の身となった。青木高級副官も困った。どうしようと私に相談に来てくれた。今までの任務上私が残りますと申し上げたところ青木副官もほっとした様子であった。済まぬと部隊中の金を集め、いつ帰ることができるかこれでやって見てくれと渡してくれた。私も感謝した。

任務終了の日、挨拶のため米軍司令部を訪れ

た。フェルド少佐にご指導とご協力戴いたことに感謝申し上げお礼を述べた。話は色々とはずんだ。「帰国したら何をやりますか」と問いかけられた。私は「家には農場がありますので農業でもやりたい」と申し上げたら「いいなあ幸せだ」と言った。彼は「私は日本人の帰国業務が終わると朝鮮に廻ることになっている」と言われた。既にその頃から朝鮮においては南北が緊張の度を高めていた事が後になって判った。

彼は日本に帰ったら民主主義をしっかりと打ち立て下さいとも願望した。軍国主義の日本が民主主義、その時私は異様に感じた。

私は民主主義とはどういうことですかと問い返した。彼は説明するに民主主義の創始者リンカーンの言葉を出して、民主主義とは「人々の人々に依る人々のための政治」であると説明してくれた。私は彼の説明をかみしめながら聴いた。もう一つ私は伺った「今後アメリカの極東政策はどのようなになりますか」彼は率直に答えてくれた。

「アメリカから見て東洋の盟主は日本だ。今後アメリカは日本を東洋の番犬として使うことになるであろう」というものであった。さすがの戦勝国アメリカだけあって最前線の一将校に至るまでが国の方針を知り、それなりに行動しているとは素晴らしいと思った。

その後アメリカの対日政策は彼の言われた通り展開して来ている。アメリカの日本進駐は不幸中の幸と思われた。校長の戦犯問題は国府軍司令部訪問の折よく説明し理解を求めて置いたためか、簡単な取調べで無罪放免となり帰国の途に着くことができた。下関の土を踏んだのが昭和二十一年五月十四日であった。

## 六 平和の礎の巻

故郷に帰って見るとまず眼に映ったものは両親をはじめ多くの年配者の年をとった(老いた)ことと子供達の大きくなったことであった。老いの様子を見るにつけ銃後の守りの労多かったことが

うかがわれた。出征者のうち、戦死した者は意外に多かった。こよなく祖国を愛し、同胞を愛し、勝利を夢見ながらかけがえのない青春を戦場に散らしていった戦友を思う時、必ずや祖国復興をなし遂げ、尊い英霊の御心にこたえなければならぬと、生きて還った者の務めであると復員軍人の誰もが思ったことであろう。

南方戦線からの復員者はマラリア等のため体をこわした者も多かった。しかし生きて還った者は一、二年の静養で復活できた。

戦後の日本は何もないづくしであった。食糧がない、農業をやるうとしても肥料もない、農具といえばすりへった鍬、鎌ぐらいである。復員兵士は二十四、五歳から三十歳前後の者が多かった。いかに苦しくとも戦場での苦しみに比べれば敵弾の来る心配はない。あらゆる職場にあって働け働け働けで、なり振りかまわず働いた。一方アメリカの援助物資によって食糧その他の資材等も徐々に日本全土に支給され復興へと歩み出すことがで

きた。

今日は、世界の経済大国、世界の先進国として繁栄を極めているが、平和日本の礎を築いたのは実に大正生まれの復員軍人の働きによるところであると言っても過言ではないと思われる。